



良書に親しもう

エプロン通信員 城間 ちえみ

若葉が芽吹き始め、春色のなごやかな季節になりました。皆さんお元氣ですか。今年「国民読書年」ということもあり、先日、取材を兼ねて宜野湾市民図書館に行きましたので紹介したいと思います。

館内にはジャンル別に仕分けされた本がきちんと整理されており、ゆつくりと本が読めるように机やソファが用意されています。また、調べもの支援のため、インターネットが利用できるPCコーナーやAVコーナー、また目の不自由な方のための朗読サービスマや児童へ読み聞かせを行う部屋、おはなしのくに“があり、2階には会議室や学習室、展示ホール、カルチャーホールなどがあります。また、自動交付機も置いてあり、住民票の写し、印鑑登録証明書、税関系証明書が発行でき、とても便利だと思いました。貸出点数は本5冊、雑誌2冊(最新号を省く)、視聴覚資料(ビデオ・DVD・CD・カセット)3点、貸出期間は15日以内となっています。開館時間は水・木・金が午前10時～午後7時、土・日・月が午前10時～午後5時までです。

また、移動図書館「ちゅらゆめ号」もあり、2週間の割合で市内各地で貸出を行っています。

近年若者の活字離れや、本離れが叫ば

れて久しい現状です。こうした中で、政府は本年を「じゃ、読もう」のキャッチフレーズを掲げ、今年を「国民読書年」としました。多くの方が良書に触れ、読書の楽しさを実感する機会にしていきたいものです。読書には人を育む力があると思います。中でも長く読み継がれてきた古典や文学作品には人類の英知が凝縮されています。私は図書館に行つて、前から読みたいと思っていた本が見つかり嬉しくなりました。何よりも嬉しいことは無料で読めるということ。また良書に縁することで、向上心が沸き、知識も豊かになり幸福になれると思います。1日5分でも10分でもいい、地道な読書の積み重ねは、時と共に大きな財産となることでしょう。私も時間を見つけて、図書館を利用したいと思います。



茶 ぐわいゆんだく 71

必要は発明の母!? 酔いどれ坊主の大発明!

カラカラ

ーは、今でもよく使われている沖縄の代表的な焼物の酒器の一つです。すわりが良く、少々のことでは倒れない形をしています。



▲カラカラー

このカラカラという、かわいらしい響きの名前は、どうやってつけられたのでしょうか?

佐喜眞興英(※①)の『南島説話』(一九二二年)に次のような話が採録されています。

「昔、或る所に酔いどれ坊主がいた。時々、大事な酒瓶をひっくり返してしまうので、悔しい思いをしていた。そこで倒れない酒瓶を作ろうと、餅形の酒器を作った。巧みな大発明であった。それが評判になり、人々がこの酒器をカラカラ(貸せ貸せ)と言ったため、坊主はこれにちなんで名づけた。」というもの、宜野湾村(当時)では一般に聞ける話だったそうです。

また一説には、カラカラの胴体を作ってから注ぎ口を張りつけるという製造方法からというものもあり。胴体と注ぎ口を張りつけた部分に穴を空ける時に、その切り取られた陶器の破片が胴体の中に残り、酒がなくなると、カラカラと音を立てることから名づけられたという説です。

名前の由来には色々な説がありますが、お酒だけではなく、音も楽しめるところが親しまれている理由なのかもしれませんね。



▲※①佐喜眞興英(1893～1925) 宜野湾村新城出身。法律家、沖縄研究者。

『宜野湾市史』の問い合わせ 教育委員会文化課 ☎093-44430